

北海道の挨拶行動の地域差 都市性の観点から

著者	大石 岳
雑誌名	東北文化研究室紀要
巻	63
ページ	1-16
発行年	2022-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/00134762

北海道の挨拶行動の地域差

——都市性の観点から——

大石 岳

北海道の挨拶行動の地域差

——都市性の観点から——

大石 岳

一、はじめに

一・一 本研究の目的

北海道方言の研究では、言語の構造面に焦点を当てた研究は多く見られ、共通語化が進行していることが明らかにされている。その一方で、言語の運用面に焦点を当てた言語行動の研究はあまり見られず、十分な検討がなされているとは言えないのが現状である。また、言語行動の研究においては挨拶行動が代表的なものとして取り上げられることが多いが、北海道ではその挨拶行動についても研究が遅れている。買物場面における挨拶行動の地域差を扱った篠崎・小林（一九九七）によると、言語行動の研究においては、都市性のような社会的な地域差に目を向ける必要があり、また、全国レベルだけでなく市町村単位のようなミクロな地域差を扱うことも重要であるとのことである。

以上より、本研究では、北海道、とりわけ、東北方言の影響をあまり受けておらず、全国各地からの移住者により開拓された北海道内陸部の市町村を対象に、都市性という社会的要因の観点から挨拶行動の地域差を明らかにする。

一・二 調査方法

一・二・一 調査対象地域

本研究では、調査対象地域として、道央内陸部の六地域を取り上げた。具体的には、札幌市（都市性が高い地域）、旭川市（都市性が中程度の地域）、音威子府村、中川町、美深町、南富良野町（以上、都市性が低い地域）の六地域である。

都市性の程度を測定する際には、総人口、人口密度、人口増減率、昼夜間人口比率、産業の種別就業者の割合、各種施設数（学校数、病院数、図書館数、公民館数の総数）、商業・近隣商業地域面積、大都市圏（札幌市）までの移動距離の計八つの尺度を用いた。そして、道央内陸部の計五四市町村の尺度の数値を総合的に比較し、都市性の程度別に六地域を選出した。

一・二・二 調査対象者と調査場面

調査法は、アンケート調査を用いた。アンケート調査の調査対象者は、「①現在当該地域に住んでいる六〇歳以上の話者」「②当該地域で生まれ、当該地域の小学校を卒業した者」「③当該地域での居住歴

が最も長い者」という二つの基準のうち、必須である①に加え、②か③のいずれか、あるいは②と③両方の基準を満たす者とした。調査人数の目標数は、各地域で最低一〇〇人（都市性が低い地域については、四地域の合計が一〇〇人）の計三〇〇人である。また、調査場面として、一日の流れに沿った「終日の挨拶場面」を設定した。さらに、言語行動にはウチ・ソト意識が関係していると思われるため、各場面について、挨拶の相手が「ウチ」の者か「ソト」の者かで分類した。では、以下に終日の挨拶場面の概略を示す。

【終日の挨拶場面】（一定のストーリーの流れに沿って質問）

- ① 病院に行くため、家族に声をかけて家を出る場面（家族への外出時の挨拶⇨ウチ）
- ② 歩いている途中で、近所の人が庭の草取りをしているのに遭遇した場面（近所の人への声掛け時、または労をねぎらう時の挨拶⇨ウチ）
- ③ 病院に行く前に、近所の家に寄り、野菜をおすそ分けする場面（近所の人に贈り物を渡す時の挨拶⇨ウチ）
- ④ 病院への道中、取引先、漁協・農協の人など、お客さんにあたる人に遭遇し、以前食事をご馳走になった際のお礼を言う場面（仕事相手へのお礼の挨拶⇨ソト）
- ⑤ 病院に入る場面（受付への来院時の挨拶⇨ソト）
- ⑥ 診察室に呼ばれ、入室する場面（先生や看護師への入室時の挨拶⇨ソト）

- ⑦ 診察が終わり、退室する場面（先生や看護師への退室時の挨拶⇨ソト）
- ⑧ 会計時に受付に呼ばれた場面（受付への応答の挨拶⇨ソト）
- ⑨ 会計が終了し、病院を出る場面（受付への病院を出る時の挨拶⇨ソト）
- ⑩ 帰宅場面（家族への帰宅時の挨拶⇨ウチ）
- ⑪ 最近東京から近所に引っ越して来た人が挨拶に訪れたので、自己紹介する場面（他地域から来た人への自己紹介の挨拶⇨ソト）

二、分析の観点としての言語的発想法

本研究では、アンケート調査の有効回答を得ている札幌市の話者一〇〇名、旭川市の話者一二七名、音威子府村（七名）・中川町（四名）・美深町（二八名）・南富良野町（四三名）の話者一一九名の結果を分析する。分析に際しては、言語行動の特徴を測るための指標として、小林・澤村（二〇〇九）が提示した七つの言語的発想法のうち、「言語化」および「定型化」という二つの発想法を用いる。言語的発想法とは、言語に対する規範意識や言葉遣いのある種の好みのようなものであり、物事をどのように表現するかという、そもその考え方のことである（小林・澤村二〇〇九）。小林・澤村（二〇〇九）では、挨拶場面における、種々の言語的発想法の地域差について言及されているため、本研究でも上記概念を取り入れることとした。また、本調

査で得られた回答を見た際に、特に上記「言語化」および「定型化」という発想法と関連が深いと考えたため、本研究では、上記二つの発想法を取り上げる。

以下に、本研究で取り上げる二つの発想法の定義を示す。

【言語化】

口に出して物を言うことで、相手に対して何らかのメッセージを伝えようとするか否か、すなわち、言葉を使ったコミュニケーションに積極的であるか消極的であるか、という姿勢の違い。

【定型化】

場面に応じて何らかの決まった言い方を定めようとするか否か、また、そのような一定の表現を社会の約束事として守ろうとするかどうか、という姿勢の違い。

(小林・澤村二〇〇九、一四六―一四七頁)

では、前述の二つの言語的発想法の測定方法について述べたい。以下に、本研究で取り上げる「言語化」および「定型化」の二つの発想法について、その測定方法を示す。

【言語的発想法の測定方法】

「言語化」…

本研究では、そもそも発話を行わない場合も考慮し、発話を行わな

い（以下「発話なし」と呼ぶ）数量を測定する。さらに、発話が見られた場合には、一つの意味のまとまりである句単位で発話内の要素（以下「発話要素」と呼ぶ）を抽出し、その発話要素の数量を計測する。

例えば、

「こんにちは。いつもお世話になり、ありがとうございます。また、先日は食事をいただき、ありがとうございました。」
という発話からは、

「こんにちは」「いつもお世話になり」「ありがとうございます」の五要素が取り出せる。以上より、発話を行わない数量が少なく、

発話内に出現する発話要素の数量が多いほど「言語化」の程度が高いと判断する。なお、発話要素の数え方については、一つの回答の中に同じ発話要素が複数見られた場合でも、全ての発話要素を数量に計上することとした。

「定型化」…

本研究では、各挨拶場面における定型表現を設定し、それらの出現個数を「定型化」度合いの基準とした。本研究における定型表現とは、共通語的な観点において、各場面で最も用いられやすい表現のことであり、「こんにちは」「行ってきます」のように、語の実質的な意味がほとんど失われている表現のことを指す。これは、日中の出会いの挨拶表現の形成過程を明らかにした中西（二〇一四）の定義と同様のものである。それに加え、本研究では、実質的な意味を表す表現であつ

でも、決まり文句的（慣用的）に用いられている表現（自己紹介の際に「〇〇です」と名乗るなど）については、定型表現に含めることとした。以上より、定型表現の数が多いほど「定型化」の程度が高いと判断する。なお、分析に際しては、あくまでも発話内容の「定型化」を見るため、発話を行わないという回答については、有効回答数に含めなかった。また、定型表現の数え方については、一つの回答の中に同じ定型表現が複数見られた場合でも、全ての定型表現を数量に計上した。

三、「言語化」の観点からの分析

三・一 各地域の総合的な「言語化」度合いの比較

まず、小林・澤村（二〇〇九）が示す言語的発想法のうち、「言語化」の観点からの分析を行っていきたい。では、表1に、都市性の異なる各地域における、挨拶場面ごとの「発話なし」の数量および発話要素の数量を示す。また、表1に記載の出現割合について、図1に「発話なし」の出現割合、図2に発話要素の出現割合を棒グラフ化したものを示す。なお、表中の「〇／〇」は「総数量／有効回答数」を表している。また、図表における割合の数値については、小数点第二位を四捨五入したものである。

まず、表1および図1における各地域の「発話なし」の総合計数を比較すると、いずれの地域も「発話なし」の割合は一〇％台に留まっております。口に出して挨拶を行わない話者は少数であることがわかる。

それでも、地域ごとの総合計数に差は見られ、音威子府村・中川町・美深町・南富良野町、旭川市、札幌市の順に「発話なし」の数量が多いことが見て取れる。これは、都市性が低い地域ほど、口に出して挨拶を行わない傾向を示していると言えるであろう。また、場面別に見ると、その傾向は、特に家族や近所の人といった「ウチ」の者に対する私的な挨拶場面、特に、①家族への外出時の挨拶、②近所の人への声掛けの挨拶、⑩家族への帰宅時の挨拶において特徴的であった。

一方、表1および図2における各地域の発話要素の総合計数を見ると、「発話なし」と正反対の結果となり、札幌市、旭川市、音威子府村・中川町・美深町・南富良野町の順で発話量が多いことがわかる。これは、都市性が高い地域ほど、口に出して、多くの内容が含まれた長い挨拶を行う傾向を示していると言える。こうした結果は、札幌市のような都市性が高い地域ほど「言語化」の程度が高く、音威子府村・中川町・美深町・南富良野町のような都市性が低い地域ほど「言語化」の程度が低いことを示していると言える。

明治期の本格的な開拓開始時の北海道は、地理的条件もあり、他地域からの人の流入が少なかったと考えられる。そのような状況においては、コミュニティ内の顔馴染みの者同士のやり取りが中心になると考えられるため、挨拶を行わない、あるいは、挨拶を行っても必要最低限の挨拶しか行わないといったことが生じていた可能性がある。その後、時代を経るにつれ、域内の交通や北海道と他地域を結ぶ交通が発達したことにより、北海道内陸部においても、人の流れが活発になったと言える。その結果、今までコミュニティ内の者とのやり取りが中

表1. 各地域における挨拶場面ごとの「発話なし」の数量および発話要素の数量

場面	発話なし			発話要素		
	札幌市 (都市性高)	旭川市 (都市性中)	非都市部諸地域 (都市性低)	札幌市 (都市性高)	旭川市 (都市性中)	非都市部諸地域 (都市性低)
①家族への外出時の挨拶	5/77 6.5%	5/101 5.0%	18/90 20.0%	136/77 176.6%	152/101 150.5%	116/90 128.9%
②近所の人への声掛けの挨拶	5/87 5.7%	18/117 15.4%	18/94 19.1%	134/87 154.0%	161/117 137.6%	111/94 118.1%
③近所の人に贈り物を渡す時の挨拶	0/89 0.0%	4/119 3.4%	6/91 6.6%	190/89 213.5%	226/119 189.9%	158/91 173.6%
④仕事相手へのお礼の挨拶	2/89 2.2%	3/119 2.5%	6/99 6.1%	169/89 189.9%	243/119 204.2%	145/99 146.5%
⑤病院受付での来院時の挨拶	26/84 30.1%	32/116 27.6%	34/92 37.0%	98/84 116.7%	138/116 119.0%	71/92 77.2%
⑥先生や看護師への診察室入室時の挨拶	6/81 7.4%	15/119 12.6%	14/101 13.9%	126/81 155.6%	150/119 126.1%	115/101 113.9%
⑦先生や看護師への診察室退室時の挨拶	1/90 1.1%	7/123 5.7%	4/104 3.8%	101/90 112.2%	147/123 119.5%	110/104 105.8%
⑧受付への会計に呼ばれた時の挨拶	29/92 31.5%	46/123 37.4%	39/103 37.9%	80/92 87.0%	91/123 74.0%	72/103 69.9%
⑨受付への病院を出る時の挨拶	37/90 41.1%	53/124 42.7%	45/100 45.0%	58/90 64.4%	80/124 64.5%	56/100 56.0%
⑩家族への帰宅時の挨拶	7/73 9.6%	13/107 12.1%	16/92 17.4%	118/73 161.6%	133/107 124.3%	89/92 96.7%
⑪他地域から来た人への自己紹介の挨拶	3/88 3.4%	9/119 7.6%	8/95 8.4%	173/88 196.6%	203/119 170.6%	136/95 143.2%
合計	121/940 12.9%	205/1,287 15.9%	208/1,061 19.6%	1,383/940 147.1%	1,724/1,287 134.0%	1,179/1,061 111.1%

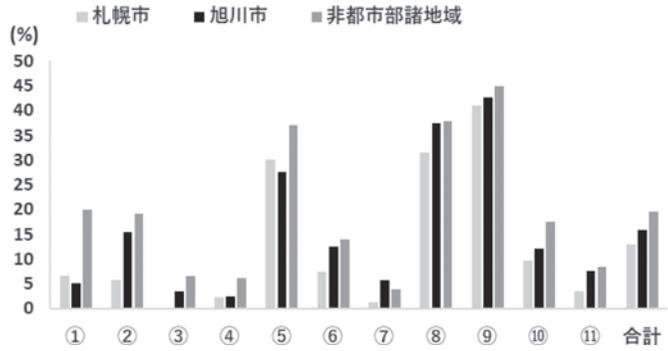


図1：各地域の挨拶場面ごとの「発話なし」数量の出現割合

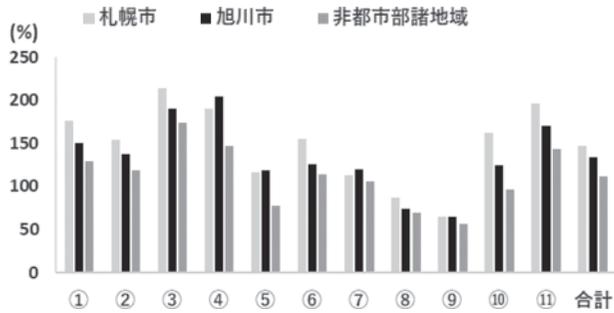


図2：各地域の挨拶場面ごとの発話要素の出現割合

心であった道内各地域の居住者は、他地域の者とも交流し、良好な人間関係を築く必要が生じたと考えられる。その上では、口に出して念入りに挨拶を行い、誠意や社交性を示すことこそが重要であったのであろう。

こうした背景を踏まえ、北海道の「言語化」の変遷を考えると、北海道においては、まず、挨拶を行わない状態から口に出して挨拶を行う状態への変化が生じ、その後、挨拶を念入りに行う状態への変化が

生じたと考えられる。この前提を本研究の結果と照らし合わせると、まず、口に出して挨拶を行うという変化においては、都市性の差に関わらず、北海道内陸部のいずれの地域でも、挨拶を行う方向で変化がおおむね完了している可能性が考えられる。しかし、場面別に見ると、公的な場面に對し、私的な挨拶場面においては、都市性が低い地域ほど、その変化が遅れが見られると言える。そして、この変化に続く、口に出して挨拶を念入りに行うという変化については、都市性が高い地域ほど、この変化が進んでおり、都市性が低い地域ほど、その変化は遅れているのであろう。

三・二一 各地域の挨拶場面ごとの「言語化」度合いの比較

では、ここからは、いくつかの特徴的な傾向が見られた場面を取り上げて、分析を行う。まず、家族に対する私的な挨拶場面（①家族への外出時の挨拶、⑩家族への帰宅時の挨拶）から見ていきたい。表1や図2を見ると、この二場面は、どちらも札幌市、旭川市、音威子府村・中川町・美深町・南富良野町の順で発話要素の数量が多く、各地域の全体的な傾向と合致するものであった。以下に、上記二場面における、各地域の特徴的な回答例を示す。

- (1) ① 家族への外出時の挨拶（札幌市）…
「〰へ行って来ます。帰りは〰時頃になると思います。留守をよろしく。」ⁱⁱⁱ⁾
- (2) ① 家族への外出時の挨拶（旭川市）…

「病院に行つて来るね。」

- (3) ① 家族への外出時の挨拶（音威子府村・中川町・美深町・南富良野町）…

「ちよつと行つてくるから。」

- (4) ⑩ 家族への帰宅時の挨拶（札幌市）…

「ただいま。病院は親切だったし、大丈夫だったので安心した。」

- (5) ⑩ 家族への帰宅時の挨拶（旭川市）…

「ただいま。今帰りました。」

- (6) ⑩ 家族への帰宅時の挨拶（音威子府村・中川町・美深町・南富良野町）…

「ただいま。」

※ローマ数字は、発話要素を一要素ごとに区切つたものである。以降の例も同様。

上記回答例を見ると、都市性が高い札幌市では、(1)で「行つて来ます」という共通語的な最低限の挨拶に加え、行き先や帰宅時間の情報、留守を頼む旨の伝達も述べており、発話要素の総数量は三要素と多くなっている。それに対し、都市性が中程度の旭川市では、(2)で行き先のみ、都市性が低い音威子府村・中川町・美深町・南富良野町では、(3)で行き先も伝えず出かける旨のみを伝えており、いずれの発話要素の数量も一要素と少なくなっている。

これは、⑩ 家族への帰宅時の挨拶でも同様であり、都市性が高い

北海道の挨拶行動の地域差——都市性の観点から——

札幌市では、(4)のように「ただいま」という帰宅時の最も共通語的な挨拶に加え、病院の様子や受診後の自身の心情なども述べられており、発話要素の総数量も四要素と多い。一方、都市性が中程度の旭川市や都市性が低い音威子府村・中川町・美深町・南富良野町では、(5)(6)において、「ただいま」や「今帰りました」といった自身の帰宅を知らせる旨のみが述べられており、発話量も旭川市が二発話、音威子府村・中川町・美深町・南富良野町が一発話と少ない。

このような特徴が見られた理由として、都市性が高い札幌市の方が、非都市部に比べ、交友関係の幅やそれに伴う行き先の幅も広いことが考えられる。そのため、札幌市では、外出時や帰宅時に行き先や出かけた先であったことなどの詳細を述べなければ、家にいる家族は、話者の動向を把握できなくなってしまうと考えられる。それに対し、都市性が低い音威子府村・中川町・美深町・南富良野町のような地域では、地域の狭いコミュニティ内での交友関係が中心であるため、簡素な表現のみでも、家にいる家族は、話者の動向をすぐに理解できるであろう。

続いて、公的な挨拶場面である⑪ 他地域から来た人への自己紹介の挨拶を取り上げる。本場面においても、表1や図2が示す通り、札幌市、旭川市、音威子府村・中川町・美深町・南富良野町の順に発話要素の数量が多く、各地域の全体的な傾向と合致するものであった。では、以下に、⑪ 他地域から来た人への自己紹介の挨拶における、各地域の特徴的な回答例を示す。

(7) ① 他地域から来た人への自己紹介（札幌市）…

「ご丁寧ありがとうございます！ ○○と言います。宜しくお願ひしますね。何か困ったりしたら、いつでも気軽に声かけて下さいね。」

(8) ① 他地域から来た人への自己紹介（旭川市）…

「ご丁寧ありがとうございます。宜しくお願ひします。」

(9) ① 他地域から来た人への自己紹介（音威子府村・中川町・美

深町・南富良野町）…

「よろしくお願ひします。」

まず、都市性が高い札幌市では、(7)において、「ご丁寧ありがとうございます」「○○と言います」「宜しくお願ひしますね」といった共通語的な挨拶に加え、「何か困ったりしたら、いつでも気軽に声掛けて下さいね」と相手を気遣う表現も見られ、発話要素の総数量は五要素と多くなっている。その一方で、都市性が中程度の旭川市では、(8)において、「ご丁寧ありがとうございます」「宜しくお願ひします」という共通語的な挨拶のみが二要素で述べられている。さらに、都市性が低い音威子府村・中川町・美深町・南富良野町においては、(9)で「よろしくお願ひします」という最低限の挨拶を一要素述べただけである。

このように、札幌市のような都市部ほど「言語化」の程度が高い挨拶が見られた要因としては、他地域からの人の流入が多く、そうした人達と接する機会も多いという大都市特有の社会構造が関係している

と考えられる。このような社会構造においては、コミュニティ外である他地域から来た人を受け入れ、そうした人達とも良好な人間関係を構築することが重要であると言える。その結果、札幌市の話者は、多くの内容を含んだ長い挨拶を行うことにより、社交性を示していると考えられる。それに対し、音威子府村・中川町・美深町・南富良野町のような非都市部では、他地域からの人の流入が少ないため、コミュニティ外の人との人間関係の構築というのはそこまで重視されていないと言える。その結果、他地域から来た人だからと言って、特別な気遣いをするのではなく、家族や近所の人といった「ウチ」の者に対して行うような必要最低限の挨拶で済ませている可能性が考えられる。

以上のように、挨拶場面ごとに各地域の発話量を比較すると、場面により多少の差異は見られるもの、おおむね場面の性質の違いに関わらず、全体的な傾向同様、札幌市、旭川市、音威子府村・中川町・美深町・南富良野町の順で発話要素の数量が多いという結果になった。この結果は、札幌市のような都市性が高い地域においても、音威子府村・中川町・美深町・南富良野町のような都市性が低い地域においても、挨拶を行う相手の「ウチ」「ソト」の別で話す量を調整していないということを示していると言える。前述の通り、都市部である札幌市においては、「ソト」の者と接する機会が多いため、こうした「ソト」の者に向けた「言語化」の程度が高い挨拶が発達したと考えられる。逆に、非都市部である音威子府村・中川町・美深町・南富良野町においては、狭いコミュニティ内の「ウチ」の者とのやり取りが主となるため、こうした「ウチ」の者に向けた「言語化」の程度が低

い挨拶が発達したのではないだろうか。

四、「定型化」の観点からの分析

四・一 各地域の総合的な「定型化」度合いの比較

ここからは、小林・澤村（二〇〇九）が示す言語的発想法のうち、「定型化」の観点から各地域の挨拶表現を分析したい。以下に、本研究で定める挨拶場面ごとの具体的な定型表現を示す。

【各挨拶場面における定型表現】

- 〔場面① 家族への外出時の挨拶〕…「行ってきます」
- 〔場面② 近所の人への声掛けの挨拶〕…「こんにちは」
- 〔場面③ 近所の人に贈り物を渡す時の挨拶〕…
「どうぞ」「召し上がってください」
- 〔場面④ 仕事相手へのお礼の挨拶〕…
「ご馳走様でした」「ありがとうございました」
- 〔場面⑤ 病院受付での来院時の挨拶〕…
「よろしく願います」「こんにちは」
- 〔場面⑥ 先生や看護師への診察室入室時の挨拶〕…
「失礼します」「よろしく願います」「こんにちは」
- 〔場面⑦ 先生や看護師への診察室退室時の挨拶〕…
「ありがとうございました」「失礼します」
- 〔場面⑧ 受付への会計に呼ばれた時の挨拶〕…

「はい」「○○です（名乗る）」「お願いします」「ありがとうございました」

〔場面⑨ 受付への病院を出る時の挨拶〕…

「ありがとうございました」「失礼します」

〔場面⑩ 家族への帰宅時の挨拶〕…「ただいま」

〔場面⑪ 他地域から来た人への自己紹介の挨拶〕…

「相手の挨拶に対し）ありがとうございます」「○○です（名乗る）」「初めまして」「（こちらこそ）よろしく願います」

以上を受け、都市性の異なる各地域における、挨拶場面ごとの定型表現の出現個数を表2に示す。また、表2に記載の出現割合について、図3に棒グラフ化したものを示す。なお、表中の「○／○」は「総数量／有効回答数」を表しており、図表における割合の数値については、小数点第二位を四捨五入したものである。

まず、表2および図3から各地域における定型表現の総合計数を比べると、顕著な差ではないものの、都市性が中程度の旭川市、都市性が高い札幌市、都市性が低い音威子府村・中川町・美深町・南富良野町の順で定型表現の数量が多かった。とは言え、旭川市と札幌市の数量はほぼ同程度であり、これらの二地域と音威子府村・中川町・美深町・南富良野町の間には差が見られる。また、総合計の割合を見ると、いずれの地域においても、六〇％～七〇％台という高い割合で定型表現が用いられていることがわかる。以上より、現在の北海道内陸部で

表2. 各地域における挨拶場面ごとの定型表現の数量

場面	札幌市 (都市性高)	旭川市 (都市性中)	非都市部諸地域 (都市性低)
①家族への外出時の挨拶	18/72 25.0%	35/96 36.5%	29/72 40.3%
②近所の人への声掛けの挨拶	33/82 40.2%	47/99 47.5%	30/76 39.5%
③近所の人に贈り物を渡す時の挨拶	13/89 14.6%	13/115 11.3%	6/85 7.1%
④仕事相手へのお礼の挨拶	82/87 94.3%	114/116 98.3%	77/93 82.8%
⑤病院受付での来院時の挨拶	32/58 55.2%	38/84 45.2%	30/58 51.7%
⑥先生や看護師への診察室入室時の挨拶	89/75 118.7%	105/104 101.0%	68/87 78.2%
⑦先生や看護師への診察室退室時の挨拶	88/89 98.9%	114/116 98.3%	96/100 96.0%
⑧受付への会計に呼ばれた時の挨拶	53/63 84.1%	69/77 89.6%	53/64 82.8%
⑨受付への病院を出る時の挨拶	40/53 75.5%	56/71 78.9%	39/55 70.9%
⑩家族への帰宅時の挨拶	51/66 77.3%	69/94 73.4%	54/76 71.1%
⑪他地域から来た人への自己紹介の挨拶	92/85 108.2%	128/110 116.4%	82/87 94.3%
合計	591/819 72.2%	788/1,082 72.8%	564/853 66.1%

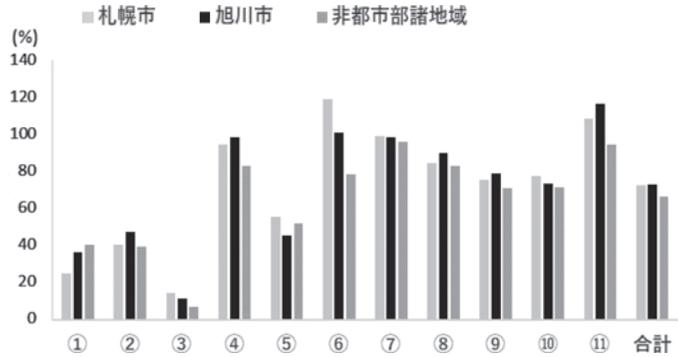


図3：各地域の挨拶場面別の定型表現の出現割合

は、札幌市や旭川市といった都市的な性格が強い地域ほど、共通語的な定型表現を挨拶に用いるという変化が進んでいると言えるが、その変化自体は非都市部においても相当進んでいると考えられる。すなわち、都市性の違いによる差は見られるものの、いずれの地域においても、「定型化」の度合いが高い挨拶が定着してきていることが伺える。

四・二 各地域の挨拶場面ごとの「定型化」度合いの比較

次に、挨拶場面ごとの定型表現の数量に着目すると、私的な場面か公的な場面かと言う場面の性質の違いにより、定型表現の数量に違いが見られる。表2や図3を見ると、私的な挨拶場面である全四場面（① 家族への外出時の挨拶、② 近所の人への声掛けの挨拶、③ 近所の人に贈り物を渡す時の挨拶、⑩ 家族への帰宅時の挨拶）のうち、⑩ 家族への帰宅時の挨拶を除く三場面において、いずれの地域でも定型表現の出現割合は五〇%以下と少ない。また、① 家族への外出時の挨拶のみ、都市性が低い地域

ほど定型表現が多く見られ、全体の傾向と大きく異なるものであった。これは、「言語化」の項でも述べたが、札幌市では上記場面において、「行ってきます」という定型表現よりも、「〜に行ってきます」と具体的な行き先の情報を付加する実質的表現の方を多く用いているためであろう。

公的な場面については、全七場面（④ 仕事相手へのお礼の挨拶、⑤ 病院受付での来院時の挨拶、⑥ 先生や看護師への診察入室時の挨拶、⑦ 先生や看護師への診察室退室時、⑧ 受付への会計に呼ばれた時の挨拶、⑨ 受付への病院を出る時の挨拶、⑪ 他地域から来た人への自己紹介の挨拶）のうち、⑤ 病院受付での来院時の挨拶を除く六場面において、いずれの地域でも定型表現の出現割合が五〇%を上回っている。以上より、現在の北海道内陸部においては、地域による程度の違いこそあれ、私的な場面よりも、改まった場面で定型表現が多く用いられていると言える。このように、場面によるスタイルの使い分けが比較的明確になされているという傾向からも、北海道の言語が共通語的な方向へ向かって変化していることが伺える。

では、「言語化」の分析同様、挨拶場面の性質別に各地域の回答の分析を行っていききたい。まず、私的な挨拶場面である③ 近所の人に贈り物を渡す挨拶を取り上げると、表2や図3が示す通り、都市性が高い札幌市、都市性が中程度の旭川市、都市性が低い音威子府村・川町・美深町・南富良野町の順で定型表現の数量が多かった。しかしながら、その出現割合はいずれの地域でも七〇〜一四〇%台と非常に低く、定型表現がほとんど用いられていないことがわかる。以下に、上

記挨拶場面における、各地域の特徴的な回答例を示したい。

- (10) ③ 近所の人に贈り物を渡す時の挨拶（札幌市）…
「一人暮らしで食べ切れないので頂きものですが、手伝って下さい。」

- (11) ③ 近所の人に贈り物を渡す時の挨拶（旭川市）…

「家でとれた野菜です。いかつたら食べて…。」

- (12) ③ 近所の人に贈り物を渡す時の挨拶（音威子府村・中川町・美深町・南富良野町）…

「もらったから食べてちょうだい。」

※上記挨拶場面の定型表現は「どうぞ」「召し上がってください」。

上記回答例が示すように、この場面においては、(10)「手伝って下さい」、(11)「食べて…」、(12)「食べてちょうだい」のように、いずれの地域においても、定型的ではない表現が多く用いられているのが特徴的であった。

以上より、都市性が高い札幌市においては、近所同士の付き合いが希薄化していると言えるが、それでも、仕事相手や他地域から来た人のような「ソト」の者よりは、近所の人を身近な人物として捉えている可能性が考えられる。その結果、都市部である札幌市においても、共通語的である定型表現はあまり見られなかったであろう。とは言え、その内実を見ると、札幌市では(10)「手伝って下さい」やその他「食べてください」など、丁寧体の表現がやや目立ったのに対し、旭川市

や音威子府村・中川町・美深町・南富良野町では、(11)「食べて…」や(12)「食べてちょうだい」、その他「あげる」など普通体の表現も多く見られた。すなわち、札幌市において、改まったスタイルが用いられるのに対し、旭川市や音威子府村・中川町・美深町・南富良野町においては、くだけたスタイルが用いられる傾向にあると言えるであろう。こうした傾向は、都市部よりも非都市部の方が近所の人を身近な人物として捉えている可能性を示していると言える。

続いて、公的な挨拶場面である⑪他地域から来た人への自己紹介の挨拶を取り上げたい。この挨拶場面は、全場面を総合的に見ても、地域に関わらず最も定型表現が目立った場面である。具体的には、表2や図3が示す通り、札幌市と旭川市で一〇〇%を超える高確率で定型表現が用いられており、音威子府村・中川町・美深町・南富良野町でも九〇%以上という高い割合である。地域間の差は、都市性が中程度の旭川市、都市性が高い札幌市、都市性が低い音威子府村・中川町・美深町・南富良野町の順で定型表現の数量が多く、これは全体の傾向とも同じものであった。より詳細に見ると、旭川市・札幌市の両市と音威子府村・中川町・美深町・南富良野町との差がやや開いているように思われる。では、上記挨拶場面における、各地域の具体的な回答例を以下に示したい。

- (13) ⑪ 他地域から来た人への自己紹介の挨拶（札幌市）…
「(名前を名乗り)こちらこそよろしくお願ひ致します。」
「ごていねいにありがとうございます。」
- (14) ⑪ 他地域から来た人への自己紹介の挨拶（旭川市）…

「丁寧なありがとうございます。」(こちらの名前を云つて)よろしくお願ひ致します。

北海道は四季がはっきりして住みやすい所ですよ。落着きましたらどうぞお待ちして居ります。」

- (15) ① 他地域から来た人への自己紹介の挨拶(音威子府村・中川町・美深町・南富良野町)：「〇〇です。よろしくお願ひします。」

※上記挨拶場面の定型表現は「相手の挨拶に対し」ありがとうございます「ございます」「〇〇です(名乗る)」「初めまして」「よろしくお願ひします」。

上記回答が示す通り、いずれの地域においても、定型表現を用いるのはもちろん、「〇〇です(名前を名乗る)」「ありがとうございます」「よろしくお願ひします」といった複数の定型表現を組み合わせさせて挨拶を行う場合が多かった。ただ、その数量を見ると、音威子府村・中川町・美深町・南富良野町では、(15)で「〇〇です」および「よろしくお願ひします」という二つの定型表現のみを用いているのに対し、札幌市や旭川市では、(13)および(14)で「名前を名乗る」、「よろしくお願ひ致します」、「ありがとうございます」という三つの定型表現が組み合わせられている。このように、都市性が高い札幌市や中程度の旭川市では、非都市部である音威子府村・中川町・美深町・南富良野町以上に多くの定型表現を組み合わせる傾向にあり、それが、地域間の差につながったと言える。

札幌市や旭川市といった地域は、非都市部の四地域(音威子府村・中川町・美深町・南富良野町)と比べ、都市的な性格が強い地域であると言える。このような地域においては、他地域からの人の流入が盛んであるため、他地域から来た人に対し、自己紹介の挨拶を行う場面も頻繁にあると考えられる。その結果、札幌市や旭川市といった都市的な性格が強い地域の話者は、他地域から来た人とのやり取りに慣れているため、決まりきった定型表現を複数持ち合わせており、それが今回のような定型表現の多さにつながったのかもしれない。その一方で、音威子府村・中川町・美深町・南富良野町のような非都市部では、他地域からの人の流入が減多に無いため、そうした人達とのやり取りにも慣れておらず、持ち合わせている定型表現の種類も少ないと言える。それにより、他地域から来た初対面の人に対し、改まった定型表現は用いるものの、その数は少なくなっていると考えられる。そして、同様の理由で、定型表現以外の配慮表現もあまり持ち合わせていないと言える。

以上のように、挨拶場面ごとに多少の差は見られたものの、いずれの地域においても「ウチ」の者に対する私的な場面では、「定型化」の程度が低い挨拶が多く見られ、「ソト」の者に対する公的な場面では、「定型化」の程度が高い挨拶が目立った。こうした場面の性質によってスタイルシフトを行うという傾向は、共通語的な傾向であると言える。本研究の結果、地域により多少の差は見られるもの、おおむねいずれの地域においても、この共通語的な変化が相当進行していることが示されたと言える。

五、まとめと今後の展望

本研究では、都市性と北海道の挨拶行動の地域差の関係を明らかにするために、アンケート調査によって得られた各地域の回答を「言語化」「定型化」という小林・澤村(二〇〇九)の言語的発想法の観点から分析した。

まず、言語的発想法の観点からの分析の結果、「定型化」については、多少の差こそ見られたものの、概ね都市性の違いに関わらず、道央内陸部のいずれの地域でも定型表現が浸透し、「定型化」が進んでいることが明らかになったと言える。それに対し、「言語化」については、都市性が高い札幌市ほど、その傾向が強く、非都市部ほど「言語化」が進んでいないことが明らかになった。

以上より、「言語化」については、口に出して念入りに挨拶を行い、「定型化」については、定型表現を用いるといった共通語的な傾向がいずれも都市性が高い札幌市で多く見られた。一方、都市性が低い音威子府村・中川町・美深町・南富良野町ほど、そのような傾向は低かったと言える。これまで述べてきた通り、こうした傾向の背景には、都市部と非都市部の社会構造やそれに伴う言語環境の違いが大きく影響していると考えられる。具体的には、仕事相手や他地域から来た人などの「ソト」の者と日頃からやり取りする機会の多い都市部の札幌市では、そうした人達と良好な人間関係を築くために、「言語化」や「定型化」の度合いが高い挨拶が発達したと考えられる。それに対して、家族や近所の人といった「ウチ」の者とのやり取りが主である音

威子府村・中川町・美深町・南富良野町のような非都市部では、都市部のような仰々しい挨拶は必要無いため、その逆の傾向である簡素な挨拶が発達したのではないかと考えられる。

最後に、本稿の冒頭でも述べた通り、種々の先行研究により、北海道では言語形式の共通語化が概ね完了していることが示されている。本稿の分析の結果、言語行動の観点においても、共通語的な変化が相対進んでいることが明らかになったと言える。ただ、一口に共通語的な変化といっても、その変化の進行度合いは「言語化」や「定型化」など観点の違いによって異なると言える。今後は、こうした観点について、個別に取り上げ、より詳細に分析していくことで、北海道の言語行動の特徴や変化の過程についてさらなる知見が得られると言える。また、研究においては、開拓時に全国各地からの移住者が移り住んだ北海道内陸部を対象に調査を行ったが、今後は、東北からの移住者が多く住む北海道沿岸部との言語行動の違いも明らかにする必要がある。さらに、道内各地域の文化的発展の背景などに着目し、開拓時の移住元の地域と言語行動の関係についても調べることで、北海道の言語行動の実像をより詳細に明らかにできると言える。

文献

朝日祥之(二〇〇八)『ニュータウン言葉の形成過程に関する社会言語学的研究』ひつじ書房

石垣福雄(一九七六)『日本語と北海道方言』北海道新聞社

井上史雄（一九七六）「道南浜ことばにおける共通語化のパターン分類」『北海道大学人文科学論集』一三三

小野米一（一九七八）「移住と言語変容」大野晋・柴田武編『岩波講座 日本語』別巻「日本語研究の周辺」岩波書店

小野米一（一九九七）「北海道（特集 日本の方言と言語行動）——各地の方言生活の特色——具体例を挙げつつ」『國文學』四二（七）

小野米一（二〇〇一）「移住と言語変容」大野晋・柴田武編『岩波講座 日本語』別巻「日本語研究の周辺」岩波書店

熊谷康雄・江川清・杉戸清樹・米田正人（一九九二）「H—八 北海道における言語生活調査（三）…近所づきあい・あいさつの行動の男女差、地域差、年齢差」『日本行動計量学会大会発表論文抄録集』一九

国立国語研究所（一九六五）「共通語の過程…北海道における親子三代のことば」『国立国語研究所報告』二七

国立国語研究所（一九九〇）「北海道における共通語使用意識…富良野・札幌言語調査から」『研究報告集』一一

国立国語研究所（一九九七）「北海道における共通語化と言語生活の実態…中間報告」国立国語研究所

小林隆・澤村美幸（二〇〇九）「言語的発想法の地域差と社会的背景」『東北大学文学研究科研究年報』五九

椎名渉子・小林隆（二〇一七）「談話の方言学」小林隆ほか『方言学の未来をひらく——オノマトペ・感動詞・談話・言語行動

北海道の挨拶行動の地域差——都市性の観点から——

——』ひつじ書房

篠崎晃一・小林隆（一九九七）「買物における挨拶行動の地域差と世代差」『日本語科学』二一

洪谷勝己（一九九二）「言語習得と方言」徳川宗賢・真田真治（編）『新方言学を学ぶ人のために』世界思想社

杉戸清樹・熊谷康雄・米田正人（一九九二）「H—七 北海道における言語生活調査（二）…買物場面での言語行動意識」『日本行動計量学会大会発表論文抄録集』一九

田中章夫（一九六五）「近代語成立過程にみられるいわゆる分析的傾向について」『近代語研究』武蔵野書院

中西太郎（二〇一四）「柳田が導く日中の出会いのあいさつ表現研究の可能性」小林隆編『柳田方言学の現代的意義——あいさつ表現と方言形成論——』ひつじ書房

中西太郎（二〇一五a）「コミュニケーション・ギャップの一因としてのことばの地域差」『応用言語学研究』一七

中西太郎（二〇一五b）「言語行動の地理的・社会的研究——言語行動学的研究としてのあいさつ表現研究を例として——」『方言の研究』一

中西太郎（二〇一七）「言語行動の方言学」小林隆ほか『方言学の未来をひらく——オノマトペ・感動詞・談話・言語行動

——』ひつじ書房

中西太郎（二〇一八）「あいさつの方言学のこれまでとこれから」小林隆編『コミュニケーションの方言学』ひつじ書房

中西太郎(二〇一九)「出合いの挨拶の定型性と反復性」東北大学方言研究センター編『生活を伝える方言会話「資料編・分析編」』ひつじ書房

中村明・佐久間まゆみ・高崎みどり・十重田裕一・半沢幹一・宗像和重編(二〇一一)『日本文章・文体・表現事典』朝倉書店

西尾純二(二〇〇九)「再検討・日本語行動の地域性」『言語』三八(四)

北海道方言研究会(一九七八)「共通語化の実態——北海道増毛町における三地点全数調査——」『北海道方言研究会叢書』一

北海道方言研究会(一九八〇)「松前のことば——北海道松前町における共通語化——」『北海道方言研究会叢書』二一